

「幼児の教育」編集三十年に思う

津 守 真

「幼児の教育」誌の編集に、私がつきまわることになって、こととして丁度三十年になる。昭和二十八年十一月五日に、当時すでに健康がすぐれなかった倉橋惣三先生のお宅で、及川ふみ園長と私とが集まって編集会をしたのが、私の出席した最初の編集会である。

この雑誌は、もともと、東京女子高等師範学校附属幼稚園内フレイベル会から、明治三十四年に発行されたのが最初で、フレイベル会は後に日本幼稚園協会となったが、以来、東京女高師がお茶の水女子大学にかわって後も、一般の商業ベースの雑誌と違って、大学側で編集するという大方針はかわらずにつづけられてきた。それにしても、発行に伴う実務はフレイベル館が引き受けられ、編集の内容には一切関与しないという寛容さに支えられて、今日まで絶えずにつづけることができただのである。私の出席した最初の編集会で、まず話されたことは、この編集と発行に關することだったし、その後三十年間、この点について大きな変化なくつづいたことは、幸運なことであつた。

その最初の編集会で、私は何か話すように求められたとき、私はこの雑誌を売れるようにすることができるかどうか自信がないけれども、たとえ読む人が自分ひとりになっても、根本的なことを考えつづけるようにしたい、時の流行を追うことはしないつもりであるという趣旨のことを話した。いま思うと、全く大それた、自分勝手なことを言ったものであるが、そして、本当にそんな風になったら、保育雑誌として出版する価値はなくなってしまふのだが、倉橋先生は、そのことをたいへん気に入ってくださり、その意気ですよろしく頼むと言われた。それから長い間、私は折にふれてこのときのことを考える。幼児教育で根本的なことというのは、ただひとつの規準があるのではない。もしもそうだったら、毎日、毎年、違う内容の記事ができるはずはない。いろいろの人が、いろいろの角度から、子どものこと、保育のこと、自分自身のことなどを、根本にさかのぼって考えようとしており、そういう人たちは、書き手も読み手も毎年たえることなく、たくさんある。この雑誌は、こういう方々に支えられて現在に至っている。根本的なことは、具体的なことをはなれであるのではないから、雑誌の記事は常に多様で、新しくなっていく。

最初の編集会のときに、この雑誌の編集方針について話されたことのメモが私の手もとに残っている。十項目にまとめて記してあるので、この機会に紹介したい。次に掲げるのは、そのときのメモの順序のままの、十項目の要約である。

- 1、保育の根本を理解させ、保育の精神を伝えることを従来からの方針としてしていること
- 2、幼稚園史の資料となるような、各地方の幼稚園の今昔をとり上げること
- 3、幼児保育者としての根本問題で、保育に直接関係のないような分野の人たちによる記事、保育者にふわりとした感じを与える記事をいれること
- 4、文学的読みものをいれること

5、母親が理解できる程度の講座をいれること

6、協力委員が交替に執筆すること（当時、協力委員が六名きまっていた）

7、倉橋先生の保育考をできるだけ多くとりいれること

8、保育研究の前進のため、専門学者の協力のもとに、保育界の問題および保育理論の研究の項目をいれること。保育に関する研究の発表機関になるように

9、投稿は検討の上、できるだけとり上げること

10、海外の幼児教育事情をとり上げること。外国人の執筆があるとよい

倉橋惣三先生は、このときから一年半後に亡くなった。協力委員は、牛島義友、及川ふみ、斉藤文雄、多田鉄雄、波多野完治、山下俊郎の六名の方々だったが、牛島、波多野両先生以外は、皆、亡くなった。

こうして各項目を見てみると、三十年の間に時代が変わったことを感じるし、それぞれの項目について、幾多の変遷があったことを思う。また、いずれも、十分に果せなかったことに気付くけれども、しかし、大ざっぱに言えば、ここに掲げられたことは、現在の編集方針と大差はないことを確認できる。

いま、この三十年間を顧みて、私は直ちに二つのことが頭に浮ぶ。第一は、幼稚園の普及に伴うこと、第二は、知的早教育の風潮に伴うことである。

幼稚園の増加、就園児数の増加が、この三十年間ほど著しかった時代は他にはなかった。このことは、現代において避けられなかったことであるにせよ、いくつもの問題を生んだ。私が観察する

ところでは、幼稚園が急増したとき、そのときの社会的要請が優先し、幼児教育についての先輩たちの思考や実践の積み重ねは、ほとんど顧みられなかった。昭和初頭には相当の水準にまで高められていた日本の幼児保育の上に、新たな時代の要請を加えてゆくのでなく、先人の努力の歴史から切断されて、幼稚園が普及した。そこでは、幼稚園には子どもの生活を第一に考える場所ではなくなり、最新の学問の応用と称する人為的な訓練や、経営者の恣意が優先し、あるいは、行政上の規準が、必要以上に、保育の内容まで束縛する傾向を生んだ。

上掲の2の項目で各地方の保育史が挙げられているのは、柔い性情の幼児にふさわしい保育の場をつくることを何よりもたいせつと考えて出発した幼児教育の先覚者のスピリットにたえず新たにふれるという意図があったと思う。現代の社会には、過去のいかなる時代にもなかったような新たな問題があり、その中で、物的にも、精神的にも、幼児の生活を確保することには新たな困難がある。私共は、実際に、そのただ中にあるので、子どもと共に生活をつくることを第一に考える原点へと、たえず立ちもどる必要があるのだと思う。

幼稚園がこのように普及し、制度化された現在、教師の身分が安定する反面、職務内容が固定化して、子どもと共に生活をつくり上げるよりも、きまった枠の中に子どもをいれることをもって教師の仕事と考える気風を生んでいる。しかし、子どもを育てる仕事は、子どももおとなも、冒険心をもって未知の可能性に挑戦する勇気を失ったときに、人間の最も大切な部分を失うのではないか。

知的早教育の風潮は、一九六〇年代に最高潮で、現在は子どもを多面的に見る傾向が強まっているとはいえ、現代の学問として、幼児の発達や教育をどう考えるかという根本課題は未解決であり、不安定である。前掲の8の項目に伴う問題である。一方に、眼前の現象に左右されることなく、そ

れらを通き支配する原理と法則を求める科学的学問であり、人間や教育もその学問の対象とすることは可能であり、その観点からは価値もある。しかしまた、他方、子どもという未知な可能性もった他と交わることを中心課題とする保育の領域においては、眼前の現象のすべてに着目し、そこでとらえられたことを全体と根源に結合する思考法を必要とする。幼児の保育は、この後者の学問によって支えられると私は考えるが、その内容は、この分野で未だ十分に展開されていない。今後の保育学の課題である。

三十年前の最初の編集会のときに、倉橋先生から云われたことがもうひとつあった。それは、この雑誌では、執筆者に肩書きをつけないことを習慣としてきたということである。その人に書いて頂くという趣旨である。

子どもが遊ぶことのできる幼稚園をとすることは、この雑誌の創刊以来の主張であった。そして、幼児の生活のあるがままの全体に心を配る保育は、本誌でくり返しとり扱われたテーマであった。生活を共にして幼児を育てる保育者の中には、このことのたいせつさを体感で感知している人はたえずいる。声を大きくして主張することによって教えられるのではない。いつの時代にも、どこにも、自ら獲得することのできる人間の事実である。それだけに、そのことの価値を明らかにし、認識することはたいせつである。本誌の重要な機能のひとつは、そのことにあるようだ。

なおこの間、編集の実務については、池戸允子、木原溥子、寺井直子、赤間峰子、水田順子、皆川美恵子の六名の方々にお世話になった。いずれもお茶の水女子大学の関係者である。ここに記して厚く感謝したい。